

# 『今月の天候と農作業』

通巻第5615号  
5月号  
平成30年5月3日発行  
宮崎県  
宮崎地方気象台



## 【 予報のポイント 】

暖かい空気に覆われやすく、向こう1か月の気温は高い見込みです。  
低気圧や前線の影響を受けやすく、向こう1か月の降水量は多く、向こう1か月の日照時間は少ない見込みです。

## 【 確 率 (%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	10	30	60
降水量	九州南部	20	30	50
日照時間	九州南部	50	30	20

## 【 予想される向こう1か月の天候 】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率60%です。降水量は、多い確率50%です。

日照時間は、少ない確率50%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率50%です。2週目は、高い確率60%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

### <1 週目の予報> 5月5日(土)～5月11日(金)

低気圧や前線の影響で、曇りや雨の日が多いでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、

週間天気予報 (<http://www.jma.go.jp/jp/week/>) を参照してください。

### <2 週目の予報> 5月12日(土)～5月18日(金)

天気は数日の周期で変わるでしょう。

### <3 週目から4週目の予報> 5月19日(土)～6月1日(金)

天気は数日の周期で変わりますが、低気圧や前線の影響を受けやすく、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

## 普通作物

### ◆早期水稻

---

#### 1 水管理と病害虫防除

茎数が株当たり20本程度になったら、無効茎抑制や根の健全化、倒伏軽減のため「中干し」を行います。落水は5～7日で、軽く足跡が付く程度とします。

「いもち病」の予察情報に注意し、ほ場を観察しましょう。田植え時の箱施薬剤を施用していないほ場や肥料が効いて葉色が濃いほ場は特に注意が必要です。補植用の苗が残っている場合は、すぐに処分します。また、発生を確認したら速やかに防除します。

#### 2 穂肥

月末から6月上旬にかけて穂肥の時期です。コシヒカリでは倒伏しやすいので、幼穂長が1センチの時期に行います。食味や品質に影響するので施用量は葉色を見て決めます。基肥・追肥の一発タイプの肥料を使用している場合の穂肥は必要ありません。

### ◆普通期水稻

---

#### 1 田植時期と土づくり

高品質米生産には、田植え前の準備も重要です。「ヒノヒカリ」は出穂期以降に高温に遭うと白未熟粒が多発し、品質低下が起こりやすいので、極端な早植えは避けます。また、深耕で十分な作土層を確保したり、ケイ酸質資材や有機物施用で土づくりに努めましょう。

#### 2 育苗管理と田植え

塩水選後、「シンガレセンチュウ」や「馬鹿苗病」等防除のため種子消毒を行います。

籾に気泡が付いていると薬剤の効果が落ちるので、籾袋を揺すり気泡を抜きます。

出芽時が高温であったり日数が長くなると、苗が徒長し病害が発生しやすくなります。芽の長さが1センチ程度で緑化に移り、その後も高温多湿に注意します。田植時は、いもち病等の対策で薬剤の箱処理を行います。補植用の苗ははすぐに処分します。

## ◆ 麦類

---

### 1 収穫作業

成熟期の目安は穂首が黄化し穀粒からも緑色が抜け、爪を立てるとロウくらの硬さになる頃です。コンバイン収穫時期はその数日後（水分30%以下）とします。収穫後高水分のまま長時間経過すると品質が低下するので速やかに乾燥します。

（荒砂 英人）

## 施設野菜

### ◆ 収穫後期のハウス管理

---

外気温が上昇し、ハウス内の温度も高くなるため、作物の生長スピードが早くなります。生長に合わせてかん水量を増やしますが、作物からの蒸散量も増し、ハウス内湿度が高くなるなど、ハウス内は病害が発生しやすくなります。整枝摘葉等の残渣はその都度ハウス外に持出し、ハウス内を清潔に保つとともに、ハウス内の温湿度を下げるため、積極的な換気に努めましょう。また、収穫した果実の品質保持に努めましょう。栽培終了のほ場では、ウィルス媒介害虫であるアザミウマ類、コナジラミ類のハウス外への飛散を防止し、生息密度を下げるため、収穫終了後に10日以上ハウスを閉切り、蒸し込みを行った後、残渣を持ち出すようにします。

### ◆ きゅうり

---

気温も高く果実の肥大が促進されるため、収穫遅れのないよう適期収穫を心がけましょう。また、果実肥大とともに葉からの蒸散量も多くなり、水分不足による草勢低下やハウス内の乾燥による先細り果、曲り果等が発生しやすくなります。内張カーテンを利用した遮光やハウス内の湿度の確保を行うとともに、かん水や追肥による草勢維持に努めます。着果数が多く肥大の悪い場合は葉面散布も効果的です。また、ハウス内の乾燥が激しい場合は、通路等への散水でハウス内湿度を適度に保つなど生育環境の改善を行います。

## ◆ ピーマン

---

光線の透過不足による「白果」や収穫忘れによる「赤果」の発生が多くなります。また、着果の多いところでは樹への負担も大きく、成り疲れによる草勢の低下から、うどんこ病が発生しやすくなりますので、適期収穫に心掛けるとともに、果実上部の光線を遮っている茎葉、特に着果のない中枝や老化枝及び主枝の整枝・せん定を行います。一方で、直射日光による日焼け果や高温による尻腐れ果の発生も多くなるため、日中の強光線時には内張カーテンを活用して光線の調節を行います。ピーマンの根は乾燥に弱く、土壌水分が不足すると草勢が著しく低下するので、こまめなかん水・追肥を心掛けます。

## ◆ トマト類

---

主枝摘心で果実肥大は進みますが、ハウス内の高温は乱形果や着色不良の原因となります。ハウス内の温度を下げるため、換気の徹底に努めます。茎葉からの蒸散量も多くなるため、かん水量も増やしますが、一度に多量のかん水を行うとハウス内の湿度を高め、裂果や灰色かび病が発生するので、1回あたりのかん水量を減らし、かん水回数を増やします。

## ◆ イチゴ

---

二次親株の採苗時期ですが、炭そ病の発症が疑わしい株は、直ちに廃棄します。あらかじめ廃棄する分も考えて親株を多めに準備しておきます。本ほにうどんこ病やハダニが発生している場合は、苗にうつる恐れがありますので、育苗床から先に作業しましょう。

## ◆ 夏秋果菜類

---

雨よけトマト、露地きゅうり等の定植期ですが、定植後の活着をスムーズ行うことが、その後の作柄に大きく影響します。定植後1週間はこまめなかん水を行いましょう。

(黒木 正晶)

## 葉茎根菜類・いも類

### ◆共通（排水対策）

---

6月には梅雨期を迎えるので、5月中にはほ場内外の排水路の整備・点検を行いましょ。ほ場内の周辺排水路や畦と直交の排水路は排水口に確実につなげます。鍬を使って排水路を作る場合、ほ場内から排水口に向かって作業をすると傾斜を確保するためにどんどん深く掘り下げることになり作業が大変になりますので、排水口からほ場内に向かって土を上げていくと、楽に傾斜をつけることができます。

### ◆かんしょ

---

普通栽培の植え付け期です。植え付けは、なるべく曇天日を選び苗のしおれや葉の痛みを防ぎます。また、苗は採苗してすぐ植えるより、植え付け予定の3～5日前の午後に採苗し、乾燥しないよう保管した苗（これを「取り置き苗」と言います）を利用すると発根が進みやすいので、計画的に苗の準備をしましょ。

### ◆さといも

---

出芽が揃ってきます。5月中までに出る芽は親芋から出てきた芽ですので、2本以上出ているものは、大きい芽を1本のみ残し他はかき取ります。また、ほ場が乾燥すると生育が遅れるので積極的にかん水を行い生育を促します。

さといもは、近年、疫病による大きな被害が出ています。芽が出そろったら農薬による予防を開始しましょ。その後は、新しい葉の展開ごとに農薬散布を繰り返し行います。

### ◆らっきょう

---

下旬から収穫期に入ります。土壌水分が多いときに収穫すると、腐敗しやすくなりますので、天候に注意して収穫します。また、ウイルスに感染した株を種球として残さないように注意しましょ。ウイルス罹病株は、葉のよじれや球が小さくぴったりくっつき合い、分けにくいことで区別できます。

### ◆スイートコーン

---

ミニハウスや大型トンネル栽培の収穫期を迎えます。アブラムシ、メイチュウ類がつきやすいので適期防除により商品性向上に努めましょ。また、

収穫適期の幅が狭いので早朝収穫の徹底と調整時も品温を上げないよう品質保持に努めましょう。

(杉村 幸代)

## 果 樹

### 1 常緑果樹

---

#### ◆温州みかん

今年の開花は平年よりもやや早く、着花量は全体として多い傾向が見られるため、多くの養分を必要とします。

また最近では、発芽から開花までの期間が短く、花の充実不足に伴う生理落果が多く見られます。新梢や花芽の充実のために、発芽期から開花期にかけて、窒素主体の葉面散布を数回行いましょう。

極早生温州の火山灰土壌のマルチ栽培では、5月下旬からマルチ被覆の時期になります。園地周りから雨水が浸入せず、水はけの良い設置条件を確保し、過乾燥や減酸対策として、かん水施設を設置しましょう。

#### ◆かんきつ全般

かんきつ類に被害を及ぼすゴマダラカミキリに寄生するカビを利用した、効果の高い防除資材が開発されています。設置適期は5月下旬から6月上旬ですので、活用しましょう。

#### ◆完熟きんかん

結果枝の充実促進のために、窒素主体の葉面散布やたっぷりのかん水を行い、結果枝の充実促進を図りましょう。

また、5月下旬に発根促進剤と尿素を土壌施用することで一番果の結果安定が図られます。具体的な方法については、普及センターやJAに相談しましょう。

#### ◆マンゴー

5月から6月にかけては、本県産マンゴーの出荷最盛期です。収穫が近づくにつれて果皮が弱くなり、高湿度や果実結露による「あざ果症」や「やに果」が増加してきます。ハウス内の急激な温度変化を防ぎ、ヒートポンプや換気による除湿によって結露を防止しましょう。

早すぎる剪定は第三新梢や第四新梢の発生を助長するため、花芽分化に向けた管理が難しくなります。翌年の出荷時期を考えながら適切な時期の剪定を心がけましょう。

(鈴木 美里)

## 花 き

### ◆夏秋ギク

---

育苗・定植・摘心・側芽の整理作業や消灯・再電照等の管理については、それぞれの作型に応じて計画的に行いましょう。「フローラル優香」は、導入している系統に適したジベレリンの散布回数・濃度等を確認し、散布を実施してください。「精の一世」については、消灯後は完全シェードの11時間日長で管理します。7月出荷作型は幼若性を獲得する恐れがあるので、消灯前は12℃程度、消灯後は18℃程度の夜温を確保しましょう。

### ◆秋ギク

---

採穂用親株の挿し芽は、作型と穂冷蔵の有無を考慮し、所要日数を計算して計画的に作業を進めてください。キクの腋芽は高温で消失しやすくなりますので、腋芽の伸びにくい品種・系統は親株床をできるだけ涼しくし、必要に応じてBA剤を散布しましょう。

### ◆スイートピー

---

受粉後4～5日程度で莢の色が緑色から黄色に変わってきたら採種を行います。採種する場合は、草勢の異なった種子が混入しないように収穫時期毎に行い、採種ロット毎に種子を管理してください。

収穫した莢は風通しの良い日陰で乾燥させ、種子を取り出した後に必ず選別を行い、殺菌剤で消毒後に冷暗所で貯蔵します。

### ◆ホオズキ

---

結実時期に入ります。間引き・葉かきを行い良品生産に努めましょう。極端な低温や高温では花粉の発芽不良により着果が悪くなるので温度管理に注意します。7月出荷作型の各種病虫害防除は6月の着色処理前に定期的に行ってください。マルハナバチの巣箱は日陰を作るなど、涼しい場所に置いてください。

## ◆シキミ

---

春芽の伸長から硬化時期になります。特に黒しみ斑点病ならびにサビダニ類はこの時期の防除が重要ですので、確実に実施しましょう。

(藤原 明紀)

## 畜 産

### ◆家畜

---

今月は、気候が安定し、家畜の生産性が上がる時期ではありますが、日中に気温が上昇するため、温湿度環境を見ながら、細霧装置や換気対策等の飼養管理を徹底しましょう。特に乳牛は、暑熱ストレスの影響を受けやすいため、ヒートストレスメーターで温湿度を確認しながら必要な対策を行ってください。

### ◆飼料作物

---

今月は飼料用イネやとうもろこし・ソルガム等の作付け時期です。栄養価の高い飼料作物を栽培するためには土壌管理が不可欠です。飼料作物の作付け時には、土壌分析を行い、土壌分析結果に基づく適正な施肥管理を行い、苦土石灰やヨウリンなどの土壌改良材も忘れず施肥しましょう。また、今月はイタリアンライグラスの収穫時期でもあります。イタリアンは刈り取りが遅れるほど、粗タンパク質含量等の栄養価が低下します。出来るだけ、栄養価と収量が高い出穂期（穂が約半分出た時期）での刈り取りを行いましょう。なお、サイレージ調製を行う場合は、乾かし過ぎると良好な乳酸発酵がされないため、適度な水分（予乾約半日、水分60%前後）でロールベール・ラッピング調製を行いましょう。

(三角 久志)



## 工芸作物

### ◆茶

---

#### 1 摘採と整枝

二番茶を摘採する茶園では、芽揃いを良くするために、一番茶の摘採10～15日後頃を目途に整枝を実施します。

#### 2 茶園の更新

樹高が高く、枝条が細くなった茶園は更新が必要です。中切りは、一番茶直後が望ましく、中切り位置は高さ40～50cm、枝幹の太さ4～5mmの位置を目安に実施します。中切り作業は、樹体の日焼け防止のため数回（5～7日おき）に分けて行いましょう。また、できるだけ曇雨天日を選んで行うと樹体への影響を軽減できます。

#### 3 病虫害防除と施肥

クワシロカイガラムシの防除を行う場合は、幼虫の初発を確認して十日後頃が防除適期となりますので、ふ化状況を見ながら、散布ムラのないよう丁寧に薬剤を散布しましょう。特に、雄繭が目立ち枝枯れが見られる茶園では、中切りと組み合わせて防除を実施してください。

また、チャノキイロアザミウマやチャノミドリヒメヨコバイ等の害虫、炭疽病やもち病・黒葉腐病等の病害に対する防除は、二番茶萌芽～開葉期に地区基準に準じて実施します。

ただし、一番茶摘採期間中の降水量が平年より多い場合は、遅れ芽の下葉に炭疽病が発生する場合があります。刈り番収穫後、治療効果のある薬剤を散布しましょう。

#### 4 チャトゲコナジラミ対策

県内でも本害虫発生茶園が、年々増加しています。下記項目に従い、チャトゲコナジラミが発生していないかどうかを確認して下さい。

- ①成虫は新芽に群がるので、茶園では新芽を観察する。
- ②茶園のうね間にあるクモの巣などを観察する。
- ③摘採袋や製茶工場の生葉コンテナ周囲を観察する。

(黒木 清人)

## ◆しいたけ

---

### 1 本伏せ

今の時期は、急な温度上昇が考えられるので、ほだ木の温度・湿度の管理に注意が必要です。仮伏せ中のほだ木は、しいたけ菌の活着が確認でき次第、水はけや風通しのよい場所に組み替えます。

裸地伏せでは、直射日光による高温や乾燥を防ぐため、笠木を厚さ30cm以上被せます。

林内伏せでは、下刈や整理伐により風通しを良くし、日陰が不足する場合は笠木等で補います。

### 2 ほだ場管理

梅雨入り前に、防風ネット等の取り外しを行うとともに、ほだ場とその周辺の雑木雑草を刈り払うなどして、通風を良くします。

また、害菌発生防止のため、害菌等の被害を受けたほだ木等の整理を行います。

(永野 学)

## ◆たばこ

---

- 1 中葉下位着位（旧下葉）は取り遅れがないよう、心止までに収穫し、それ以降の着位は、適熟葉収穫に努めましょう。
- 2 わき芽抑制剤は、わき芽の大きさと天候に注意し、使用基準を守って散布しましょう。わき芽抑制剤使用後は、野帳・使用実績票へ記入しましょう。
- 3 心止は、地力や樹勢を考慮して時期、深さを調整して行いましょう。曇雨天が続くときは仮止を行い、天気回復を待って止め直しましょう。病虫害を防止するため、心止後の花軸部は、除去したわき芽と同様にほ地外に持ち出し適正に処理しましょう。
- 4 病害防除対策として、排水溝の完備等、耕種的防除を中心にしながら、効果的な農薬防除による対策に努めましょう。農薬を使用した際には、野帳・使用実績票へ記入しましょう。
- 5 異物混入防止のため、ほ地でのマルチ片の回収と収穫、吊り込み、取り下ろし、荷造り後の葉元確認、包の確認を行いましょう。

(宮崎県たばこ耕作組合)

## 内容の詳細について

---

5月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県農業経営支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。  
(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

## 向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稲	葉いもち	並	スクミリンゴガイの生息数が多いほ場では粒剤の水面施用を行います。施用に当っては水管理に十分留意し、水深が3cm程度になるように調整し、少なくとも4日間(薬剤によっては7日間)はかけ流しや落水はしないよう注意します。
	イネズリウシ スクミリンゴガイ	並 やや多	
野菜・ 工芸作物	アブラムシ類 ハスモンヨトウ	並 並	アブラムシ類は各種ウイルス病を媒介しますので、早期発見に努め、早めに防除します。
冬春きゅうり	べと病 うどんこ病 褐斑病	並 並 並	べと病対策として換気をよくし、過湿防止に努めます。 うどんこ病は乾燥条件下で発生しやすいので、適正な温度・水管理に努めます。 ミナミキイロアザミウマによって媒介される黄化えそ病が非常に多くなっています。栽培終了時の蒸し込みを確実にを行うとともに圃場周辺の除草に努めます。ミナミキイロアザミウマは、施設内では卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので、7日間隔で少なくとも3回の連続した防除を行います。
	ミナミキイロアザミウマ 黄化えそ病 (MYSV)	少 前年、前々年より 少ない	
冬春ピーマン	うどんこ病 斑点病	やや多 やや少	いずれの病害も発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、予防・初期防除に重点をおきます。罹病した茎葉等は感染源となるので、適宜除去し園外に持ち出します。 アザミウマ類は、気温の上昇とともにさらに増殖しやすくなるので、初期防除に努め中～多発ほ場では7日間隔で少なくとも3回の連続した防除を行います。
	ミナミキイロアザミウマ ヒラスハラアザミウマ	少 やや多	
冬春トマト	灰色かび病 葉かび病※	少 多	葉かび病の発病葉は、生育に支障がない限りできるだけ摘葉し、すみやかにほ場外へ持ち出し適正に処理します。薬剤散布の際は、農薬が葉裏まで十分かかるように丁寧に散布します。 栽培終了時は、黄化葉巻病を媒介するタバココナジラミの拡散を防止するため、蒸し込み等により本虫を死滅させた後に残さを処分します。
	タバココナジラミ 黄化葉巻病 (TYLCV)	少 並	
バレイショ サトイモ	疫病	—	本病は発生すると急激に進展し、まん延するので予防防除に重点をおきます。薬剤散布は、薬液が下葉に達するように十分量を散布します。
果樹全般	果樹カメムシ類	—	ウメやモモなどの結実中の果樹類では、飛来に注意し初期防除を徹底します。
カンキツ (露地栽培)	そうか病 かいよう病 灰色かび病	並 並 —	そうか病、かいよう病に罹病している枝葉は、感染源となるため徹底的に除去します。 灰色かび病の防除適期は落弁期です。また開花期から落弁期にかけての降雨は、本病の発生に好条件となるので注意が必要です。 ミカンハダニは、要防除水準(寄生葉率30%あるいは10葉当り寄生虫数5~10頭)に達したら速やかに防除します。
	ミカンハダニ	やや少	
茶	炭疽病	並	炭疽病対策として、一番茶摘採後の基幹防除を徹底します カンザワハダニ、チャノキイロアザミウマは、多発してからでは防除が困難になるので、早期発見・早期防除に努めます。 クワシロカイガラムシの薬剤散布量は、成園で10a当たり1,000リットルを目安に、枝幹に十分かかるように丁寧にいきます。また、激発園で、ふ化最盛期が一番茶後になる場合は、中切り更新して防除すると有効です。 チャトゲコナジラミが多発するとすす病が発生しますので早期発見に努めます。
	カンザワハダニ チャノコクモンハマキ チャハマキ チャノボガ チャノミドリヒメコバエ チャノキイロアザミウマ クワシロカイガラムシ	やや少 並 並 並 やや少 少	

1) ※は注意報を発表しています。

2) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。

3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki> です。

